

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に



CREATOR^{No} INTERVIEW 109

山田春奈 Haruna Yamada

東京都生まれ。長岡造形大学環境デザイン学科卒業。上山良子ランドスケープデザイン研究所などを経て、2004年、SPREAD設立。

小林弘和 Hirokazu Kobayashi

新潟県生まれ。長岡造形大学産業デザイン学科卒業。広告代理店を経て、2003年よりフリーランスとして活動。2004年、SPREAD設立。

SPREAD

小林弘和と山田春奈が、2004年に立ち上げたクリエイティブユニット。環境・生物・物・時間・歴史・色・文字、あらゆる記憶を取り入れ「SPREAD=広げる」クリエイティブを行う。プロジェクトに深く関わりながら、「カラーとコンセプト」を特徴に、グラフィック、プロダクト、エキシビジョンなどのデザイン&ディレクションを行う。主な仕事に「国立新美術館開館10周年」記念ビジュアル、ジャパン・ハウス ロンドン「Biology of Metal」展、工場見学イベント「燕三条 工場の祭典」など。Red Dot Design Award、D&AD awards、グッドデザイン賞、日本パッケージデザイン大賞など受賞歴多数。

No
109 SPREAD クリエイティブユニット
SPREAD / Creative Unit

続けることで見えてくる景色がある。

published_2019.10.23 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

1日の行動パターンを色で記録するアートワーク『Life Stripe』や、カラフルなテープで表情豊かな空間を創出する、ミラノデザインウィークの展示でも話題の、SPREAD の小林弘和さんと山田春奈さん。「広げる」という意味を持つ SPREAD のクリエイティビティは、色という感覚的な美しさを呼び水に、さまざまなイマジネーションを広げてくれます。2019年10月18日（金）から11月4日（月・振休）まで開催される「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2019」に出展している「六本木カラー溪谷」の制作エピソードとともに、色やデザインが秘めている可能性をお聞きしました。

見ているのは、色ではなくコントラスト。

小林 僕らが作品をつくる時は、国内でも海外の仕事でも必ず現場に足を運んで、まず場所を見ます。「見る」というのは、ほんやりそこに佇むことも、土地の歴史を調べることも含めてなのですが、できる限りその場所を理解して、場所とコラボレーションしてつくりたいという気持ちがあります。「Tokyo Midtown DESIGN TOUCH 2019」で展示をするお話をいただいたのは、1年前の紅葉の時期。街を歩いていると色鮮やかな葉っぱが地面にたくさん落ちていました。こういう光景は高揚感があるよね、とふたりで話をしていたのですが、桜が散る頃や台風の後も同じようなことを感じていて、そんな感覚から「地面をつくる」というアイデアを思いつきました。

Tokyo Midtown DESIGN TOUCH

Tokyo Midtown DESIGN TOUCH

「デザインを五感で楽しむ」をコンセプトに、2007年から毎年開催しているデザインの祭典。国内外の第一線で活躍するデザイナーや注目のデザインが、東京ミッドタウンに集結。2019年のテーマは「FUSION (融合)」。デザインと景色、サイエンス、遊びなどが融合することで生まれる新しい価値を探る。会期は2019年10月18日(金)から11月4日(月・振休)まで。

それとは別に、たとえば森林の緑や海の青をぼんやり見ている時があるじゃないですか。だけど本当に見ているのは、色ではないってことにある時気がついたんです。大胆に言ってしまうと、ですよ。じゃあ何を見ているかということ、色の奥にある無数のコントラストを見ているんです。海だったら風が吹いて波が立つと、ハイライトで光る部分と影になる部分ができるし、海の中にいる生き物が動いたり、船が行き来したりなど、いろんなコントラストが集合して面になっている。その様が心を打つんだなって。自然だけではなく、紙に印刷された色を見ても同じように感動することがあるのですが、そういう時は大体マットな紙なんです。なぜかという、マットな紙は拡大すると凹凸があって、ここにも小さい光と影ができています。そのことに初めて気づいたのが、15年くらい前に南アフリカへ行った時。日本よりも日差しが強く湿度も低いから、光がガツンと入ってくる。それを見て、頭ではなく肌でわかってしまったんです。「コントラストは美しい!!」って。

山田 わかったことにした、という感じですね。どちらかというと。

小林 その時はただわかっただけで、さっきの海とか森の話が出てきたのは、ここ5年くらいのこと。色の奥にあるコントラストが大きな存在だと考えて、人の記憶を蘇らせる色の組み合わせを追求してきたのが、これまでの15年くらいのストーリー。それと「DESIGN TOUCH」のコンセプトを組み合わせで出てきたのが、『六本木カラー 溪谷』なんです。

「サステナブル」に対する理解のずれ。

小林 会場となるミッドタウン・ガーデン周辺には、川のイメージがまずあって、普段の場所の雰囲気を感じさせつつ、がらりと景色が変わるものがありました。最初は渓谷にある石や流木をゴロゴロ置いて、それらをショッキングピンクなど非自然的な色にするというアイデアでした。けどその後、考えが変わったんです。



六本木カラー渓谷

「色景に浸る」をコンセプトに、ミッドタウン・ガーデンで約 80m にわたり展開するインスタレーション。もともと「自然や地形の変化」をイメージしたランドスケープデザインを施している、ミッドタウン・ガーデン。そのコンセプトと東京ミッドタウンの土地の歴史を見つめ、SPREAD が注目してきた広がる色の光景を掛け合わせた渓谷。全長約 1 km 以上のメッシュ素材のファブリックを使用してガーデンを覆い、昼夜異なる表情に。

photo by Ooki Jingu

Installation by SPREAD

山田 年々、環境問題の切実さをひしひしと感じていたのですが、今年のミラノデザインウィークの後、ロンドンに滞在したちょうどその時に、大規模な環境デモに遭遇したんです。5箇所のデモの集合地点がわたしたちが泊まっていたピカデリー通りで、1週間くらいバッチングして。それを見て、ものをつくること自体にデフォルトで責任を持つべきだと思うようになりました。何かをつくることだけを楽しむのではなく、使われる素材にはじまって、廃棄された後のことまでちゃんと考えてみようよ、と。それでこれはもうメッセージとして受け取るべきなんだろうなと痛感しました。

ミラノデザインウィークへの出展は、2019 年で 8 年目。最初の 4 年は SPREAD 単独で、5 年目からは空間装飾テープブランドの「HARU stuck-on design;」と出展しているのですが、環境に関する鋭い質問が年々増えているのを体感しています。例えば、「HARU はどういう点がサステナブルなのか？」と聞かれて。「壁に色をつけたい時、ペンキだと下にビニールを敷かなければいけないけれども、HARU はテープなのでその必要がない。手間も少ないしゴミも少ないんです」と説明すると、現地の人たちには結構納得してもらえます。この点は、日本の人たちが感じる改善点のポイントが少し違うかもしれません。日本で「エコ」というと、素材の話になってしまって、部分的な改善になりがちです。でも、向こうの場合は、もう少し広い視点がある。なので、今回の『六本木カラー渓谷』は感覚的にサステナブル、循環といったことをみんなが感じられる表現にしてみよう。最終的に作品の素材として布を選んだのは、終われば巻いて生地になるから。別の作品にも使えるかもしれないですね。

小林 あとは、ものというより環境をつくりたいと思ったんです。当初考えていた石や流木は具象的すぎて、物体を見るという行為に集中してしまう。もっと抽象化したほうがイメージーションを広げられると思い、コンセプトはそのまま、流れや色、大きなうねりのようなものを布で表現する現在の方法に変えました。見る対象がクリエイティブというより、その空間に佇むことで見る人の心のスイッチが押されるようなクリエイティブを目指したのです。

ミッドタウン・ガーデンの道は、散歩している人、通勤する人、ベンチでご飯を食べている人、石に座って休んでる人など、多様な人が行き来していますよね。僕らもよく通るのですが、安全だし、緑があって気分がいいし、象徴的なものがないから、いい意味で何も考えずに歩けます。この場所の記憶を辿ると、ミッドタウンになる前は防衛庁で、もっと前は武家屋敷で。今よりは閉ざされていただろうけど、やはり行き来が激しかっただろうなと想像できる。いろんな生命が、いろんなスピードで行ったり来たりしている場所であることや、大きなうねりや流れといった循環のイメージから、「動脈と静脈」というコンセプトを考えました。色合いでも、ピンク、赤、オレンジを動脈、青を静脈に見立てています。



HARU on stuck design;

株式会社ニトムズによる、「色を貼る」という新たな発想で生まれた、貼ってはがせる空間装飾テープブランド。SPREADはクリエイティブディレクターとして製品、VI、パッケージ、カタログ、WEBなどトータルに関わっていて、ミラノデザインウィークに2016年から連続出展している。画像は、2019年度の展示風景。

抽象性は生きていることの肯定につながる。

小林 去年、シンガポールの教育省からご招待いただいて、カンファレンスに参加してきました。シンガポールは教育に力を注いでいて、今までの方針はどちらかというと詰め込み教育だったのですが、多様性を尊重するためにもアートを取り入れて感性を育むことを重視しつつある。そんな中、学校のアートティーチャーを対象にワークショップを行いました。「抽象的表現の読み取り方とつくり方」をテーマに壁画をつくらう、という内容だったのですが、先生たちのアウトプットするものは、これがビルで、ここに人がいて、と考え方がとにかく具体的で物語がひとつしかなかったんです。ただ、抽象的な作品は受け取る人の心の中で物語をいかようにもつくっていけるんです、と糸口を教えると、先生たちの表情がみるみる明るくなっていった。僕らがいつも扱っている色も抽象なのですが、そこから得られるものってすごく豊かなものがあるはずで、日常的に意識していくのは大事だと思うんです。



SPREAD クリエイティブユニット
SPREAD / Creative Unit

published_2019.10.23 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

シンガポールに限らず、日本も同じようなことが言える気がします。もちろん日本はアートもデザインも発展してきているけど、日常の中にアートの考え方、デザインの考え方を生活に取り入れているかという点では、それほどではないかもしれない。例えば、イタリアと日本のタクシードライバーのどちらが奇抜で面白い会話ができるかという、圧倒的にイタリアなんですよ。彼らは僕らの作品を「これはこういうことでしょ？俺だったらもっとこうするけどね」と普通に批評してくるから。それでいいんですよ。

山田 積極的に発言するし、それを受け入れる土壌がありますよね。日本だと正解を言わなければならない空気があって、下手なことを言うと一斉攻撃されかねない。抽象的な余白は、その救いになるんじゃないかな。

小林 もっと社会が機能性だけではない抽象性を受け入れる必要があるし、余剰の中に豊かさは生まれますよね。それに抽象性は、人格や生きていることの肯定にもつながると思うんです。「それでいいんだよ」と。

色から始まったデザイン。

小林 ふたりの役割分担は、はっきりとあるわけではないんですけど、ざっくり言うと山田がアイデアを出してリサーチしたものを、僕が仕上げる。夫婦なのでずっと一緒にいますし、普段から気になったことは常に話し合ってます。

山田 彼は新潟出身で、私は東京近辺を転々としていたので、育った環境は全然違いますし、勉強してきたことも彼はグラフィックデザインで、私は環境デザイン。なので同じ分野で話し合うというより、ちょっと違う脳みそを使って話している感覚があります。なにより私たちのデザインのつくり方は、まず議論。言葉を整理して、これってこういうことだよねと言語化していく過程が大事だったりします。

小林 コンセプトがしっかりできないと、ものが見えてこないっていうのはたしかにありますね。

山田 私たちのクリエイティブのベースになっているのは、15年前に最初に発表した『Life Stripe』。1日の行動を色で表現している作品ですが、国内外での作品展を通して色の向こう側の風景を伝えることができたという実感を持ってたんです。当初は「これは何の役に立つの?」と多くの人に言われました。日本では「アプリにしたらいいんじゃない?」とか「素材は何を使ってるの?」という声も多いですが、ヨーロッパで展示するとそういうことはまず言われません。「この赤にエナジーを感じるんだ!」と感情的になったり、同じ人が次の日も来て「昨日の僕はこの色がよかったけど、今日はこれじゃないな」などと自分なりに読み解くんです。家族のことや戦争体験など自分の背景をお話される方も多くて、泣き出してしまう人もいます。「この人のことは知らないけど、知り合いになった気分だ」と言ってくださる方も。

小林 このプロジェクトは、クライアントがいるわけでもない。なので、世の中に対する自分たちの試行錯誤が直接結果として見えてくるんです。



色を通して過去や未来を行き来する。

山田 ミラノ大学で日本美術史を専攻している学生に、Life Stripeをつくるワークショップをしたこともあります。まず自分のある1日を設定して、Life Stripeをつくります。その次に誰でもよいのでヒアリングをしてもらって、その人のLife Stripeをつくる。人に聞くという行為が生まれることで、自分と社会という関係性に広がるわけです。それである女の子が父親にヒアリングをしたら、21年前の1日について話してくれて。朝から晩まで何をしたのか、こと細かに覚えていたらいいんですけど、何故かという、その日は彼女が生まれた日だったのです。彼女の知らないエピソードをLife Stripeを通して父親と共有できたことは、それ自体がもう感動的ですよ。



SPREAD クリエイティブユニット
SPREAD / Creative Unit

published_2019.10.23 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

小林 2016年に茨城でリサーチをした時は、2000年に亡くなったおばあさんの前日の様子を教えてくれた方がいました。眠っている時間が多い、とてもシンプルな1日だったんですけど、自分の祖母が亡くなった時のことを思い出したり、将来、孫ができたら僕が死ぬ時にどう思うのだろうと考えてみたりして、過去と未来に想像が行ったり来たりできるんです。

山田 見ているのはただの1パターンなのに、過去や未来の自分、あるいは家族などいろんな人のストーリーが蘇ったり、つくり上げることもできる。抽象化することで、クリエイティブできる状況が生まれるのが、Life Stripeの可能性だと思っています。

小林 日本では約15万日分のデータを集めたのですが、最近はイタリア、スイス、中国など海外からも集めていて、地域が変わると行動の傾向が変わるのもわかってきました。それとは別軸で、移民をテーマにしたリサーチも始めています。

山田 「ある1日を教えてください」とシンプルに聞くのですが、日本人は仕事をした日を教えてくれることが多いのに対して、イタリア人はデートした日を教えてくれるんです。デートはピンクで表現しているので、ピンク色のストライプがかなり多くなり、並べると単純に私たちもテンションが上がります。日本人はデートをしても隠すというか、「映画に行った」などと表現しがち。それがイタリア人には神秘的に見えるらしいですけど（笑）。

"ミックスプレート"のセンスを競ってみる。

小林 もし六本木を色に例えたとしたら.....黒と蛍光ピンクと蛍光緑かなあ。

山田 私も緑が思い浮かんだけど、わりと鮮やかな緑ですね。六本木は40年くらい前から再開発を頑張ってきたこともあって、緑地計画がしっかりしている。だからグレイッシュなビルイメージかなと思いきや、意外と緑が多いんですね。

小林 うちの事務所には、海外からのインターン希望がよく来るのですが、中にはスイス出身の学生がいたりして、なんでタイポグラフィーの本場からわざわざ日本に来たんだろう？ と思うんです。どうやら彼らにとっては、伝統的なものと秋葉原みたいなごちゃっとしたものが一緒くたにあるのが、魅力なようで。ほかにも中国出身の女性スタッフがいるんですけど、彼女が好きなのは日本のアイドルとデザイナーの浅葉克己さんですからね。

山田 すごいコントラスト(笑)。歌舞伎町もあれば、歌舞伎座もあるみたいなコントラストの強さが、海外の人にとっては東京の面白さだったりするみたいです。

小林 彼らにとってはどれも同等で、その感覚が普通なんです。だけど日本人の僕からすると、"デザイン村"と"アイドル村"みたいなものには壁があって、相容れないように感じてしまう。ただ、もっと柔軟性はあっていいと思うんです。壁を完全になくす必要はないし、無理やりコラボレーションするのも違う気がするのですが、堂々と認められるような空気をつくりたい。朝食のバイキングで納豆と洋食を組み合わせてもいいんだよってことを教えてあげたいんですよ。

山田 ちょっといけないことをしている感じがするけど、意外とおもしろかったりしますからね。

小林 どういうチョイスをするのか、ミックスプレートのセンスを競い合うのも面白いかもしれない。選んでいる本人は、その共通項が意外とわかっていなかったりするから、批評家を立てるのもいいと思う。

山田 新しいことを仕掛けるのもいいけれど、「DESIGN TOUCH」のようなイベントなんかは特に、継続していくことが大事ですよ。新しさを求めて続かなくなる例も結構ありますけど、続けていくことで伝わるし、定着していくこともあると思うから。Life Stripeも、一度見ただけでは色の向こう側にある景色はわからないかもしれないけど、何度も見ていると感じてくるものがある。結局それは、受け手側の成長だったりもするんですよ。

小林 10代で夢中になった音楽を5年後10年後に聴くと、いい音楽ほど違う発見があったりするじゃないですか。それは僕らがクリエイティブで目標にしていることでもあって、一回で終わるのではなく、自分の成長や状況の変化で違う環境になった時に、同じ作品から新しいことが見えてくるのが理想だと思っています。受け取る側がそういう視点を持てたら、次々と新しいものをつくる必要はなくなる。そうなったらたぶん、落ちている石でも笑えるようになるんじゃないかな。

取材を終えて

大学の同期で、仕事のパートナーで、夫婦でもあるおふたり。南アフリカの大地で「コントラストは美しい!!」と雷に打たれるような発見をして、色に魅せられてきた15年にわたるストーリーは、おそらくその何年も前から序章が始まっていたのでしょう。積み重ねを感じさせるおふたりのお話は、まさに過去や未来の向こう側の景色を見せてくれるような体験でした。印象的だったのは「悪い色なんてない」という小林さんの言葉。たしかにその通り。色は時に、言葉よりも雄弁なのかもしれません。(text_ikuko hyodo)